**説教20240114イザヤ49：1-7ヨハネ1：35-42「イエスと出会う」**

**聖書には歌、即ち詩文、ポエムが沢山記されています。今日のイザヤ書も歌ですし、詩編も長い長い歌です。**

**又、これは歌の定義にもよるでしょうが、聖書は丸ごとすべて歌であると言ってもよいかもしれません。時代時代の人々が、まことの神に救いを求めて、その信仰、希望、愛を、時には強い感情を込めて、一つの霊に満たされて歌い、語り継ぎ、文字にしていったのでありましょう。そういう意味では、あの十戒などの律法も、歌であると言えるかもしれません。律法をいつも喜んで口ずさむことが出来るなら、それこそその人は自ずから神に従っている幸せな人に違いありません。**

**歌、と言いますと、この地上には沢山のジャンルがあります。日本の演歌から、ドイツの有名なゲーテの詩文迄、全て歌です。もちろん神を賛美する讃美歌も歌です。アウグスティヌスと言う古代の神父は、いつか皆さんが、のよりも、教会の賛美歌のほうを好きになってくれます様に、と祈りながら説教したそうです。そういうことからするとのと、教会の賛美歌と言うのは全く切り離されたものではなくて、両者には連続性があり、人間の感情に作用するという面では同じ、ということです。**

**今は、便利な時代になって、世界各国の歌がYouTubeで聞けるようになりました。試しに、詩編の歌をYouTubeでいろいろ聞いて下さいますと分かりますが、イスラエルでは、詩編の歌はメロディーをつけて、様々な楽器の伴奏を伴って、儀式や舞台や酒場や家庭など、様々な場所で合唱されていることが分ります。つまりイスラエルの人々は、心から詩編の歌を選んで楽しんで、それらを感情を込めて歌っているのです。**

**さて、今日のヨハネ福音書に出て来ます人たちも全員イスラエルのユダヤ人ですので、そんな風に詩編を感情を込めて合唱していた人たちだったに違いありません。**

**詩編と言うのは、神に救いを求める歌、そして自分が神に救われたことを神に感謝し、救い主である神を賛美する歌です。詩編の歌は、何百年何千年と歌い継がれて来た、感情のこもった歌の数々です。**

**そして今日のヨハネ福音書の箇所では、将に画期的な出来事が起こった瞬間を記しているのです。すなわち、自分たちが待ち望んできた救い主が、自分たちの目の前に現れたという出来事です。この時の各自の高揚感と言うのは、何とも言えないものがあったのではないでしょうか。**

**喩えになるか分かりませんが、この時の高揚感と言うのは、もし演歌がお好きな方ならば、長年、好きで心のよりどころとしてきた演歌歌手が、今、目の前に現れて、自分に声を掛けてくれて、しかも泊っている処に招いてくれて、その晩、一緒に泊まったなどと言う出来事を想い起せばよいかもしれません。そんなことが起これば、もう大変ですね。**

**そして、この時のユダヤ人にとっては、その高ぶる思いと言うのは、数十年のレベルではなくて将に数千年のレベルなのでした。その、そこはかとない思いを聖書から具体的に見て参りましょう。**

**この日、先ず、「見よ、神の小羊だ」と洗礼者ヨハネはイエス様を見つめて言いました。**

**そして最後に、イエス様はシモンを見つめて、「あなたはヨハネの子シモンであるが、ケファ――『岩』という意味――と呼ぶことにする」と言いました。**

**この様に、この日起った出来事と言うのは、人々が救い主イエス様に出会った出来事でしたが、その成り行きは将に、歌の応答であります。神の小羊、そして岩という語句は、旧約聖書の至る処で語られていますし、今日の交読詩編９５編でも歌われました。神の小羊、岩という語句の意味するところは、どちらも私たちの救い主ということです。**

**小羊も岩も、ユダヤ人たちが救いを求めて歩んだ数千年の歴史の中で、日々目にして、又、実際にそこに逃げ込んだ、救いの場所だったのです。**

**ところで今の時代と言うのは不思議な時代で、何か、人間が全体的に行き詰っていることが明らかなのに、なぜか、大ぴらに、救いを求めることを恥とする時代です。自分のことは自分で救うのが立派であるという建前に多くの人が生きています。でも、自分で自分を救うこと等、実は誰にも出来ない事なので、そこらへんに無理が生じて、逆に、あらぬ方に救いを求めてしまう依存症の数々が増加してしまっています。**

**しかし、聖書に記されているイエス様の御言葉は、人間以上に人間を知っていますので、自分で自分を救おうとしてはならないとはっきりと言われています（マタイ１６・25）。人間は、自分を無にして、イエス様にすがりついて救いを求める以外に救われる道はないのです。**

**ヨハネ福音書に戻ります。今日の救い主イエス様に出会ったという箇所が一片の歌であることは、次のような、プラトンが書いた哲学書の文と較べてみれば明らかです。**

**このプラトンの文章も、人間の救いとは何かについて記されています。**

**すすんで正しい人になろうと熱心に心がける人、徳を行うことによって、人間に可能な限り神に似ようと心がける人が、いやしくも神から　なおざりにされるようなことは決してないのだから(『国家』613a8-b1)**

**確かにプラトンの言っていることは間違いなく、将に100点と言った感じですが、果たしてこんな感じで救いを説いて行っても、みんなに救いが伝わるのかと言う疑問がわいてきます。このプラトンに比べて、聖書の文章は、或る意味、非論理的です。**

**先ず「見よ、神の小羊だ」と言うヨハネの発言ですが、詩編９５編では次の様に歌われています、**

**主はわたしたちの神、わたしたちは主の民／主に養われる群れ、御手の内にある羊。**

**これは明らかに主客が逆になっています。一体、イエス様は羊なのか羊飼いなのか、ということです。このことを哲学的に論じていくと、本当に頭が痛くなりそうです。やはりここは歌として味わっていくのが良いのです。イエス様は、神であり人であるお方です。私たちにとっては、「イエス様は、神さまでありながら人となって下さった。」本当にうれしいですし、また同時に、申し訳ないですという思いも湧いて来るでしょう。**

**次に、岩ですが、これも又、イエス様が岩なのか、はたまた、人間であるペトロが岩なのかという疑問を呈することも出来ます。**

**神の民たちは、救いを求めて実際によく岩の裂け目に逃げ込んだと言います。岩の裂け目は人々を外敵から、野獣から、大嵐から、そして寒さからその都度、守った事でしょう。**

**サムエル記下には、ダビデ王の主なる神への感謝の歌が次の様に記されています（22：47）。**

**主は命の神。わたしの岩をたたえよ。わたしの救いの岩なる神をあがめよ。**

**又、詩編９５編は次の様に歌います。**

**主に向かって喜び歌おう。救いの岩に向かって喜びの叫びをあげよう。**

**この様に、神の民は、この地上の岩々を、何千年も実際に救いの場として利用していたので、この様に、岩々を、骨身に染みて、まことの救い主の喩えとして、何千年も歌い継いできたのでした。**

**ところが、イエス様は人々の前に現れて何といったのでしょう。イエス様はシモンを見つめて、「あなたはヨハネの子シモンであるが、『岩』と呼ぶことにする」と言ったのでした。ここでも著しく、主客が逆になっていることが分ります。**

**「私たち人間は、岩々にこそ、あなたというまことの救い主の姿を見出してきたのに、あなたは、その救いの岩と言うのが、この私という人間だと言われるのですか」、と思ってシモンはこの時、驚いたかもしれません。**

**とにかく、このシモンを岩と呼んだ、このイエス様の御言葉も、哲学的に解釈しただけでは、味わい知ることが出来ないのです。やはり、私たちは、「イエス様がシモンを岩と呼ばれた」、と歌いながら、イエス様の恵みとまこととを味わい知ることになるでしょう。**

**私たち人間は、論理的である前に、感情的な存在です。イエス様はそんな人間の本質もよく知っておられたので、この時、シモンの感情に突き刺さる、「あなたを、『岩』と呼ぶことにする」という御言葉を彼にお与えになったのでした。**

**今日の、ヨハネ福音書の聖書箇所は、とても短くて会話も短いです。宿に泊まったイエス様たちが何を語り合ったのかも、内容は記されていません。ですから、これを読む私たちは、かえって想像力をたくましくして、沢山時間をかけて、この聖書箇所について黙想をすることが出来るのです。実はこのそこはかとない時間のかけ方や、黙想の進め方は、現代社会でその価値を見出す人が少ないのです。この世の教育は、すぐに成果を求め、説明を求め、全てを人間達にとって明らかにしようと頑張りますが、そのことが却って大切なことを見逃すことになるのに気が付いている人は少ないのです。**

**私たちは、感情豊かに聖書を読む時、そこに書かれている御言葉に心動かされ、実際に御言葉を行う者へと導かれることでしょう。**

**洗礼者ヨハネが、隣りの二人にイエス様を告げ知らせた「見よ、神の小羊だ」という言葉には、短い中に、何千年にもわたる神の民たちの思いが凝縮されています。**

**それは、決して自分ひとりの頭の中で考え出した論理にとどまるものではないのです。**

**人間は論理ばかりを追求していくと、だんだんと周りとの関係が失われて、孤立してしまうという傾向が確かにあるでしょう。**

**それに比べ、聖書の御言葉はどれをとっても、人間たちに感情豊かに働きかけ、周りとの関係を養い、それを善きものとして深めていくという働きをして下さいます。このことは「神の小羊」という短い一節にも表れていることです。**

**この時、ヨハネの口をついて出て来たこの一節は、「神の小羊」という、神と小羊との関係性を物語るものだったのでした。**

**聖書が説くところは、一貫して、私たちが、関係性を豊かに養い育てられるということです。父・子・聖霊なる一つの神イエス・キリストは初めから、愛情豊かに生きる関係性をよしとしてこの地上へと姿を現されたのでした。**

**岩と言う喩えも実に感銘深いものがあります。ローマカトリックは、ペトロと言う人間自身を教会の土台としましたが、プロテスタント教会は、ペトロの信仰を、教会の信仰の初めとして土台としました。論理的に解釈すればこの様になります。しかし私たちは、「イエス様がシモンを岩と呼ばれた」ということを、歌いながらよく味わって参りましょう。そうすれば私たちも、シモンがイエス様によって岩とされ、永遠の時間によって、イエス様と一つとされるという救いの喜びを、岩の喩えによって味わい知ることが出来るでしょう。**

**父なる神**

**あなたは、私の名を親しく呼んでここに集められました。そして私の名前を新しくし、新しい命に生きる者として下さいます。私の口に新しい歌を授け、あなたをほめたたえることが出来るようにして下さいました。**

**どうか、私たちが益々、あなたをほめ歌いながら、あなたにお仕えする仕事を日々、行っていく事が出来ますように。**

**どうか私たちを悔い改めさせ、あなたのほうに向き直らせ、新しい命に生かして下さい。この地上での多くの苦しみを耐え忍ぶことが出来ますように。あなたから頂く小さな喜びの一つひとつを、あなたに感謝して頂くことが出来ますように。**

**死の陰の谷を行く時も、あなたの幸いを、恐れることなく、隣り人に告げ知らせていく事が出来ますように。**